

---

# 共同研究の経緯と概要

---

小野正敏

## 1 目的

都市は、時代の意志を映す鏡ともいえる。そこには為政者や住民、社会の意志が具体像として表現される。また、社会のさまざまな階層が有機的に混在し、多様な機能が収斂、内包する小宇宙といえる。そして、歴史研究の対象としては、相対的に情報量が多いという特徴をもつ。

しかし、日本の中世都市の研究は、久しく停滞した分野となり、京都や鎌倉などの一部の政権都市が目される程度で、特に地方都市については歴史学、考古学共にまとまった研究がない状況が続いていた。1970から80年代になると、各研究ジャンルで、新しい視点や方法論が提示され、新たな都市研究の気運が高まった。例えば、文献史学の分野では、従来の発達史や類型分類の都市研究から脱却し、「無縁・公界」、「境界」、「イエ」、「私有」、「境内」など、新しい都市原理を呈示しつつ再検討が始まった。そこでは、都市の空間、構造復元など、具体的な場の問題に強い関心があった。歴史地理学においても、都市域、町場の構造、景観復元に視点がむいており、その主たる資料であった絵図や文字史料、地名情報なども限界を感じていた。また考古学においても中世の遺跡が対象になるに従い、都市遺跡の発掘事例が増加し、具体的な遺構・遺物を資料として中世都市の研究も行われるようになってきていた。

こうした環境の中で、各分野の研究者が都市研究のためには、各々の視点・方法のみでは限界があり、学際的な研究が必要なことを痛感していたといえよう。80年代終わりから90年代にかけて学際的なシンポジウムや研究会が多く開催されたのもそうした状況を反映したものといえる。また、そのテーマに都市というキーワードが多いのも冒頭の中世都市がもつ位置づけを意識したものといえる。

しかし、現実にはこれらの調査、研究は、いまだに各研究者が関心を抱いた個々の都市について、各々の視点・方法で個別に行っているにすぎず、都市遺構を中心とした都市研究をどのような視点・方法で行うべきかについての共通理解ができていないわけではない。また都市に関する文献史料・考古学情報が、共通の歴史資料として提供され、理解、利用されている状況にもほど遠い。さらには、そもそも多様である都市遺構が、各地にどのくらい、どのような状態で存在しているかについてさえ、ほとんど掌握されていない現状がある。

本研究においては、各分野で都市を対象とした研究をおこなっている研究者に参加を求め、これまでの調査・研究の方法についての検討を行うと共に、今後の都市遺構の研究を行っていくための

---

---

新たな視点や方法を議論することを目指した。

なお、議論の対象とする都市は、概ね12世紀から16世紀までのものとした。この古代都市とは区別され、しかも近世以降の現代まで直接つながる都市とも区別される一群の都市を「中世都市遺構」としてまとまった形で扱い、検討すること自体意味を持つと思われる。

## 2 共同研究員

市村高男 中央学院大学商学部  
遠藤才文 県立名古屋南高等学校  
坂井秀弥 文化庁記念物課  
玉井哲雄 千葉大学工学部  
続伸一郎 堺市埋蔵文化財調査センター  
仁木 宏 京都大学文学部  
宮武正登 佐賀県教育委員会  
吉岡泰英 福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
小島道裕 本館歴史研究部  
千田嘉博 本館考古研究部  
小野正敏 本館考古研究部

## 3 経過

<平成5年度>

- ・第1回研究会 平成5年7月14日，国立歴史民俗博物館
  - (1)各研究分野における都市研究の現状と課題  
共同研究員全員による各分野からの発表。
  - (2)研究計画についての討議
- ・第2回研究会 平成5年11月17日，18日，滋賀県近江八幡城，安土城博物館
  - (1)現地調査  
近江八幡城（案内・近江八幡市発掘担当者の岩崎直也氏）  
安土城（案内・安土城博物館木戸雅寿氏）
  - (2)研究発表  
小島道裕「文献歴史地理学的方法による中世都市の調査」  
千田嘉博「城館研究の現状と課題」  
木戸雅寿「安土城の発掘と成果」
  - (3)討論 城下町遺構の調査成果と問題点について
- ・第3回研究会 平成6年3月23日，24日，国立歴史民俗博物館
  - (1)研究発表  
遠藤才文「東海における織豊期城郭の発掘調査成果について」  
吉岡泰英「建築史の視点と都市研究」

---

続伸一郎「大規模都市遺跡調査の方法と成果—堺の発掘事例から」  
小野正敏「都市研究としての陶磁器分析の方法」

<平成6年度>

・第1回研究会 平成6年7月15日, 16日, 国立歴史民俗博物館

(1) 研究発表

玉井哲雄「建築史と都市研究について」

市村高男「中世都市研究の諸問題」

(2) 討論都市研究の基礎資料集成に関して

・第2回研究会 平成6年10月20日, 21日, 国立歴史民俗博物館

(1) 研究発表

宮武正登「城館発生の過程について—佐賀平野を例に」

仁木宏「空間・公・共同体—中世都市論の方法」

(2) 討論都市研究の基礎資料集成に関して

・第3回研究会 平成7年1月12日, 13日, 国立歴史民俗博物館

(1) 研究発表

宮武正登「佐賀県・名護屋城の調査成果から」

(2) 討論

1 「都市領域」の認識と分析方法について

2 都市研究の基礎資料の集成に関して

・第4回研究会 平成7年3月23日, 24日, 茨城県結城市, 真壁町

(1) 研究発表

市村高男「東国の城下町構造の特質について」

(2) 現地調査 結城市結城城, 城の内遺跡・真壁町真壁城

<平成7年度>

・第1回研究会 平成8年8月10日, 11日, 国立歴史民俗博物館

(1) 研究発表

柴田龍司「考古学から見た房総の中世集落の変遷」

続伸一郎「考古資料からみた都市, 町, 村—堺周辺を中心として」

吉岡泰英「都市・町・村の整理への覚え書き—空間の特性」

市村高男「中世の都市・町を考える (紀行文, 絵画, 現地遺構から)」

(2) 討論 都市景観の特性について

・第2回研究会 平成7年10月19日, 国立歴史民俗博物館

研究会内容

(1) 研究発表

伊藤裕久「中世都市研究の方法と課題について—中世近世移行期の都市空間」

---

---

玉井哲雄「町屋とは何か—建築史の立場から町家（町屋）を考える」

遠藤才文「中世『愛知』の村と『都市』」

仁木 宏「禁制から考える—文献史料からみた都市」

宮武正登「考古資料からみた都市的要素」

(2) 討論 都市・町・村の認識について

(3) 都市遺跡遺構の史料集成について

・ 第3回研究会 平成7年12月16日、17日、国立歴史民俗博物館

(1) 研究発表

坂井秀弥「絵画資料にみる都市町村の表現—越後国絵図からみた16世紀末の町」

小島道裕「武家館・政治都市の規範性について」

小野正敏「都市と寺院—北陸の発掘例から」

(2) 討論都市・町・村の認識について

(3) 都市遺跡遺構の資料集成について

・ 第4回研究会 平成8年3月15日、16日、国立歴史民俗博物館

(1) 総括討論 中世都市研究の視点・分析方法・資料論について

(2) 都市遺跡、遺構の資料集成について

#### 4 概要

平成5、6年度は、中世都市研究の主たる分野から、文献史、考古学、建築史、歴史地理学の研究状況の把握とその評価について報告し、議論した。特に、現時点での各研究分野ごとにテーマ、方法、資料などの問題点を検討した。その結果、各分野ともこれまでの研究史の流れのなかでジャンルが設定された結果をうけ、研究テーマの偏りや各分野のオーソドックスな研究方法に資料が規制されることによる限界などが明かにされた。例えば、遍在性の高い文献史料から導かれた全国一律的な空間構造や景観論から、都市住民の具体像をも含めた機能論への転換の必要性、また、都市が本来位置づけられていた周辺の村や町場などと一体の地域の中でとらえる、地域構造論のような問題である。さらに考古学では、先行する大規模都市遺跡のモデルに引きずられがちであり、都市遺跡の調査数の増加と調査地域拡大の成果をうけた都市の多様性や個性、階層性の再認識などが問題となる。

そうした討論に基づき学際的な都市研究のための基礎的な資料化とその分析方法について具体的な検討を行った。そこでは、研究分野毎の既存の資料とそれに規制された方法論との連関にこだわることなく、分析材料としての情報の質を高め、量を確保すること、また方法分野を越えて共有化が可能な資料は何か、あるいは、新しい都市研究のために新たに何を資料化すべきかなどを具体的に検討し、その問題点や可能性を検討した。特に年々、質、量ともに増加する考古学による都市遺跡の発掘成果をどう共有し、有効に利用するかは、都市研究の大きな問題であり、その資料化と分析の方法は、毎回の発表や討論でも大きなテーマとなった。その討論の成果をふまえ、資料集成モデルの試案を作成した。

平成7年度は、1、2年次の討論の中で出された、例えば「都市領域の境界と可視的、不可視的施

---

設」等のように、資料化とも不可分な、都市を分析する具体的な視点についての共通認識が不十分であるという結論をうけて、2つの問題に絞って進めた。

ひとつは、各分野を横断して設定する都市分析の具体的な視点についての共同討議である。例えば「都市領域と施設」、「核と求心力」、「生活痕跡の数量化、資料化」、「都市と町、村の認識」などを具体的に議論し、どのような材料をどう資料化すれば有効かという可能性を模索した。

もう一つは、都市遺構に関する情報資料集成のモデル化である。また、目指した都市資料の共有化の試みは、都市遺構データベースのフォーマットとしてモデル的に実現された。

反省点としては、共同討論の成果をまとめられなかったことである。毎回、研究分野ごとの方法や視点に関するまとめや問題の提示がなされ、また、共同研究の利点を活かした、いくつかの複眼的な分析視点の例示があった。研究の大きな特徴であり、成果であるこれらの討議内容を成文化して呈示できなかったことに、代表者としての責任を痛感している。

また、本研究は、都市研究の方法や資料論の再検討を目的とし、具体的な都市遺構に関する何かの結論を目指すものではなかったが、当初からのテーマのひとつにあった特定の都市遺構を設定し、メンバーの協業のケーススタディーとする計画が実現できなかった。予算的な制約があったとはいえ、資料論や分析方法をメインテーマとした本研究としてはこれも大きな反省点である。

最後に、まとめと成果の刊行が大幅に遅延したことは、代表者である私の怠慢であり、早くに原稿をいただいた共同研究者をはじめ、関係各位に陳謝したい。

(国立歴史民俗博物館研究部)